

2003年某日  
警視庁国際二課

警視庁応接室  
(あるのか?)

きなこ書類の整理をしている。  
慣れない仕事のせいがか全く、はかどらない。  
き「もう！なんでよお」  
キーボードを激しく叩く。  
それを見て船木が咳払い。  
船「円道寺君、お茶2ついいかな？」  
き「ふう！はい」  
お茶を応接室に運ぶきなこ。  
入ると、船木と客が1人。一見日本人のようだが、何かが違う。  
きなこ、不審に思い、彼を見つめる。  
船「円道寺君、失礼だよ。」  
き「すみません。こちらは外国の方ですか？」  
船「この方は中国の公安局の局次長さんだ。  
このたび王凱歌...に面会に来られた」  
客「直接会う前に疑われる事なく、私の身元をちゃんと  
確かめてもらおうと思ひまして。前にも香港のニセ警官が  
こちらに来たそうですね。トラブルは嫌いでね。」  
船「こちらもそうしてもらった方が助かります。  
失礼ながら、いろいろと調べさせて頂いておりますので。」  
き「日本語お上手なんですね。」  
客「幼い頃から勉強しました。実は私、王凱歌とは同じ  
射撃養成所で学んだ仲間でもあるのです。」  
き「(驚いて) そうなんですか。ホイさんと」  
客「はい？私何が」  
き「？(何言ってるの?)」  
船「実はこの方、チャン・ホイ(江輝)さんと言われるそうだ」  
きなこ吹き出してしまった。  
き「王凱歌はあなたの名前を、日本での偽名として  
使っていたんですね。ブツ」  
船「円道寺君、笑いすぎ」  
江「...」  
一見冷静ながらも、チャン・ホイ、顔がみるみる赤くなる。

EPI2(オリジナル)の数ヶ月後と  
思ってください。  
凱歌は、裁判を控えて拘置所に入っ  
ていて、きなこは船木と雁太郎の約束通  
り事務職をやっている設定です。  
という事で、国二(国際二課)の書  
類は整理できるはずもなく...  
道場で発散するのが唯一の愉しみ  
になっているきなこさんでした。  
ちなみに、船木さんは別の女性と  
結婚予定。(結婚式に雁太郎さん  
出席予定)

公安局というものがあるのかも  
疑問です(;´ `A`)

チャン・ホイ(江輝)...中国人男  
性。凱歌より三歳上。

2000年某日  
ベトナムのとある  
雑貨店の中

ベトナムのスラム街にある店。二人の男がいる。  
外のドアにはCLOSEDと貼られている。  
男の1人は八雲、この雑貨店の店主をしている。  
だが、明らかに通常の売り物ではないライフルを磨きながら、  
久しぶりに日本語を話せて嬉しいのか、相手に向かって  
ずっと喋っている。それを聞いてか聞かずに下を向いたまま  
佇む、もう1人の男は王凱歌。  
八「あんたの射撃養成所の後輩ってふれ回っているやつ。  
あいつ、なんていったっけな？」  
凱「范火清...」  
八「そうそう、そいつだよ。あいつ香港でかなり無茶やっている  
そうだよ。名前を売り込む為に躍起になっているっていうか  
...あいつちょっと(頭を指さして)イチャってるのか？」  
凱「おれは、養成所を脱走してから、会っていない。  
こうやって、あいつの噂を聞くだけだ。」  
ライフルをバックにゆっくりと入れる八雲。  
八「ほら、極上のライフルに仕上げてやったぞ。  
なんとって、俺のここでの最後の仕事だしな。」  
凱「それ以上よけいな事を言わないで、さっさと渡すんだ。」  
八「いいだろお。日本語なんて久しぶりだしさ~。  
でも、これが終わったら、やっと日本に帰れるんだ。  
念願の骨董屋もやっていってボスに言われたし」  
凱「日本に...帰る」  
八「ああ」  
凱「ならば、一つ頼みたい事がある。」

EPI1(オリジナル)の一年前。  
1211に刃向かったベトナムの要人  
を暗殺するために彼らが潜伏して  
いるジャングルに向かう途中の  
凱歌。  
八雲の今回の設定(銃器の改造)  
劇場版と、かぶってしまいました  
た。(すみません)

気軽に頼みすぎだよ。凱歌ちゃん

<p>雑貨店の外の路地</p>	<p>八「なんだい？王凱歌に頼まれるなんて光荣だよ。 一体どんな事だい？」 凱「この人を捜してほしい」写真を出す凱歌。 八「（写真みて）なんだ？もしかして、 あんたのおふくろさんか？」 凱「そうだ、母の写真はこれ以外に後1つしか残っていない これを手放すのは身を切られる程つらいが、どうしても 捜して欲しいんだ。」 八「（写真を再度見て）ああ。わかった。日本に行ったら 捜してやるよ。」 凱「信じていいんだな？」 八「あー任しとけ。任しとけ。おふくろさんに会うために、 生きて帰ってこいよ。」 凱「わかっている。」 凱歌が店から出る。八雲、凱歌から渡された小さな子供と その母親の写真を眺める。 八「ふう～ん。これがねえ～王凱歌のおふくろさん... って、俺の知った事が。」 その写真をゴミ箱に捨てる。 外を歩いている凱歌。 凱（范...お前には、俺と同じ道を歩いて欲しくなかった。 あの頃はこんな事になるとは思いもしなかったのに。。）</p>	<p>もちろん八雲は凱歌に母親捜しを頼まれた事をこの直後に忘れました。</p>
<p>1973年 (凱歌7歳) 射撃養成所</p> <p>射撃養成所の中 所長室</p>	<p>ジープが養成所の門から中に入ってくる。 中の窓から子供達が、そのジープを覗く。 そこから降りてきたのは、王凱歌。 足をばたつかせて軍人に抵抗している。 凱「離せ！ぼくは帰るんだ！」 軍「いい加減に大人しくしろ！手に負えない小僧だ」 そこに建物の中から凱歌よりも少し年上と見られる少女が でてきた。 少女「私に任せてください。ちゃんと話をしますから」 涙で濡れている凱歌の顔を、タオルで拭きながら言った。 少女「もう大丈夫よ。ここなら何にも心配する事ないんだから ね。」 母と同じにおいがした。少し落ち着く凱歌。 凱「村に帰って、母さんを待つんだ。」 少女「母さんが戻るまで、どうやってあんたは生きていくの？ ここに来る迄に町の中をみただしょ？まだ、中国は大変な 時なのよ。あんたのお母さんが今帰ってきたら、 袋だたきにあって殺されるでしょうね。」 街では、暴動が起こり、いろんな人々が、近衛兵につるし上げに あっていた。 凱「母さん...（うづくまる）」 少女「ここは、中国を代表するオリンピック選手を養成する ための学校みたいな所で、特別に安全な場所なの。 さ、入りなさい。あたしは鄭蓮。リンって呼んでね。」 凱「僕は王凱歌」 リンが、小さな声で凱歌に囁く。 蓮（リン）「知ってる。でもあたしはあんたの事をソングって 呼ぶね。あんたの名前の『歌』は英語でソングって 言うんだよ。」 所長室に連れて行かれる。 所長をみてリンにしがみついた凱歌。 所長「王凱歌、オリンピックでの大活躍楽しみにしているぞ。 明日から本格的に訓練を行ってもらう」</p>	<p>射撃養成所（EPI1ノベライズより）と中国軍体育局（EPI1脚本より）の説？がありますが、とりあえず養成所という設定にします。</p> <p>中国の歴史...文化大革命 1966年～1977年に起こった中国の政治運動で、たくさんの罪のない人々が迫害にあった（らしいです。） 今回はちょっとお話のヒント程度の扱いをさせてもらいました。</p> <p>鄭蓮...（チェン・リン）。10歳</p> <p>そんな大変な時代に英語とか使っているリンって。。養成所の中ではなんでもあり。</p>

<p>食堂</p>	<p>次に他の入所生のいる所に行く。  20人くらいの生徒が集まっていた。  蓮「王凱歌よ。今日からみんなの仲間よ。」  リンの言葉に誰も反応しない。冷たい張りつめた空気が流れた。  蓮「気にしないでいいからね。だいたいこんなものよ。」  凱「どうして？僕は嫌われたのかな？」  蓮「そうかもね。」  あっけらかんと言うリン。</p>	
<p>凱歌達の部屋</p>	<p>蓮「さ。ここがあんたの寝る所。三人部屋だからね。」  部屋の中に、二人の少年がいた。  蓮「王凱歌が来たわよ。ソング、こっちが、あたしと同年の  ホイ、あっちがあんたより一つ上のガク。」  江(ホイ)「よろしく」少し微笑むホイ。  学(ガク)「がんばれよ」明るく微笑む学。  凱「...」</p>	<p>江輝...冒頭に出てきたチャン・ホイ  10歳。  梁学友...学(ガク)8歳。  (実は彼は日本人)  学は、中国語ではわかりにくいので、適当に日本語にしました。逆に  ホイは日本語ではわかりにくいので  中国語に...中途半端ですいません。</p>
<p>(深夜)</p>	<p>学、すすり泣く声に目が覚める。  学「凱歌、大丈夫か？」  凱歌、持っていたものを隠す。  学「それなんだい？」  凱「写真...」いったん隠したが、優しいそうな学の顔を見て  一つの写真を見せる。  学「へえー。これが家族？父さん、母さん、おじいさんかい？」  うなずく凱歌。  学「5枚くらいある...こんなによく持ち歩けたな。」  父と凱歌、祖父と凱歌、母と凱歌、家族全員と母1人の写真。  凱「母さんを探すんだ。絶対に」  学「凱歌、ここでは誰も家族の話をしてない。特に他のみんなには  言うなよ。」  凱「どうして？」  学「どうしてもだ。さっ早く寝ろ。」厳しい顔になる学。</p>	<p>実は凱歌は家から写真を5枚持って来  ていたという設定。そして現在手元  にあるのは母親1人の写真のみ。  かさばる？ドキッ!! (´~`  :)</p>
<p>(次の日から)  養成所</p>	<p>凱歌の射撃訓練が始まった。  最初はさすがに戸惑う凱歌であったが、飲み込みが早く、  初めての射撃なのに、ほぼ正確に標的を狙う凱歌。  先生「すごい腕前だ。これからがんばれよ。みんな、数日後に  試験を行うぞ。」  凱歌以外の生徒の緊張が高まる。  蓮「すごいね。ソング。」  江「ま。射撃ができるだけじゃダメだよ。他の授業もたくさん  あるからな。」  学「でも、一番は射撃ができるかだろう？オリンピック選手の  養成なんだから。」  江「そりゃそうだけど...」  凱「他の授業？」  蓮「銃全般はもちろん、カンフー、英語、日本語、数学と...  まだまだあるんだよね。」  凱「日本語？」  学「いつも思うけど、なんでだよ？」  江「オリンピック選手は、国際的なんだよ。」  蓮「(笑)ま。これから必要な事なんだね。学んで損な事は  ないからさ。」</p>	<p>えっとこの養成所の子供達はいわゆる  天才児なのでこまっしゃくれています  す。子供らしくないのはお許し下さ  い。え？そうでもない？それは逆に私  の文才がないって事で。。ぺこ。</p>
<p>(試験日の夜)  養成所</p>	<p>凱歌は、偶然に部屋の外を見た。  軍人に連れ出されそうになっている子供が見える。  門の外に出されて泣きじゃくる子供。  凱歌の後ろからリンが静かに話しかける。</p>	

蓮「ソング、あんたが来たおかげで追い出される子よ。」  
凱「どうして？試験に落ちたから？」  
蓮「もちろん、そうよ。」  
凱「でも、突然追い出すなんて。」  
蓮「才能のないものは用無し。だからみんないつ自分が追い出されるかピクピクして緊張してるの。気にする事ないわ。」  
凱「だって、可哀想だよ。」  
蓮「可哀想？じゃあ、あんたが替わりに出ていくの？  
母さんに会いたいんじゃないの？」  
凱「それは...」  
凱歌の両腕をつかむ。  
蓮「いい？自分の事だけを考えなさい。  
優しさはここではいらぬ。わかった？」  
しかたなく、うなづく凱歌。  
それを見て笑うホイ。その傍らに学。  
江「きつつい女だなあ」  
学「しかたないよ。ここでは、そのくらいでないと。  
まだ世間より楽なくらいだ。」  
江「それもそうだな。」

ちなみに  
「江輝」は、台湾の恋スナ紹介  
サイトに書かれてあった  
ホイさんの漢字名。  
「学友」は、香港の歌手『張学友』  
から頂きました。このご本人。見よう  
によるとナンチャンにそっくり。  
「王凱歌」は、中国映画監督の  
陳凱歌（チェン・カイコー）からだと  
常々思っておりますが。。

（数ヶ月後）  
養成所

まだ凱歌は、他の者に、冷やかな目で見られていた。  
ある日、食事が終わり部屋に帰ると、凱歌の机が荒らされていた。  
凱「まさか...」胸騒ぎがした。  
机の奥にしまっていた家族の写真が無くなっている。  
祖父との、父との。家族全員の写真が。  
江「どうした？」  
凱「写真がない！」  
江「写真って。。」  
学「あの家族写真だろ？」  
江「？」  
凱歌は、自分のタンスを開けた。  
来た時の服に、はさんでいた二枚の写真を手にとった。  
（母と凱歌、母1人の写真）  
学「母さんの写真はそっちにあったんだ。」  
その写真を胸にいだく凱歌。  
江「何が起こったんだよ。」  
学「凱歌の大事な写真が盗まれたんだよ。」  
ホ「それがどうしたんだよ。それくらいで」  
凱歌は江輝を睨んだ。  
学「ホイ。あんたここに先に帰ってきたよな。」  
江「おいおい俺が盗んだっていうのか？」  
凱「返して。」  
江「返せないよ。盗んでないし。だいたいまだ写真あるんだろ  
それでいいじゃないか。」  
凱歌はホイに飛びかかる。  
ケンカを聞きつけて、リンがやってきた。  
蓮「何やってるのよ！」  
学「ホイが凱歌の写真を盗んだんだよ」  
江「違うって...もういいよ。あーわかった俺が捨てたよ。  
凱歌があんまりいけすかないからさ。」  
蓮「...とにかくやめなさい。わかった？ソング」  
凱歌は、そっぽを向いていた。  
凱（返せ...僕の写真を...大切な写真を...）  
江「言うておくけど、ここには、そんな写真を持っているやつ  
なんていやしない。そんなもん見つめてメソメソされたら  
迷惑なんだよ。」  
蓮「いい加減にしなさい！」

	<p>結局写真は見つからず。誰がやったかもわからない。 星を眺める凱歌。 凱「帰りたい...こんな所大嫌いだ。」</p>	
<p>1980年 (凱歌14歳) 射撃養成所</p>	<p>あれから7年経った。中国は平静を取り戻していた。 養成所を追い出される子供もいなくなり (親元に無事に返される) それにより凱歌は、妬まれる存在では無くなっていた。</p> <p>そこに、1人の静かな少年がやってきた。 先生「新しい生徒だ。劉星龍」 江「あれが、天才なのか？」 学「そうらしいな。」 蓮「女の子みたいだね。」 江「お前より、ずっとな。」 殴られるチャン・ホイ。 先生「学友、ライフルを」 学がライフルを星龍に渡す。 星「ありがとう」 先生「構え！用意！」 的確に標的を狙う。いくら撃っても、同じ場所にしか穴が 空かない。星龍の凍てついた目を見ながらリンが言った。 蓮「ソングよりも、すごいかもしれない。逆にこんなに集中して いて精神的に大丈夫なのかしら？」</p> <p>案の定、耐えきれなくなった彼は数ヶ月後に自殺する。 蓮「自分の精神をコントロールできなければ、いくら天才でも 意味無いわ。」</p>	<p>えらく話がとんじゃいました。 (* .°)♪ボリボリ 凱歌(14)学友(15)星龍(15) 江輝・鄭蓮(17)</p> <p>この劉星龍のイメージは レスリー・チャンのつもりです。 (知る人ぞ知る？)</p>
<p>凱歌達の部屋 (深夜)</p>	<p>凱歌は、学がすすり泣く声がしたような気がした。 凱「ねえ。学。どうしたんだい。」 学「なんでもないよ。」 凱「泣いていたよね。」 学「違うよ。」 凱「星龍の事？」 学「違うっていつてるだろ？」 凱「星龍と学、仲がよかったよね。ぼく見たんだよ」 学「(少し驚いて)何を？」 凱「二人が深刻そうに話をしていた所。星龍は、きっと 学に悩みをうち明けていたんじゃないかと...」 学「違うよ。ただ話していただけだよ。寝るよ。」</p>	<p>よく夜中に泣くやつらだ。</p>
<p>1981年 (凱歌15歳) 射撃養成所 (星龍の事件から 1年後)</p>	<p>凱歌、夜中に目が覚めると、隣の学がいない。 トイレにでも行っているのだろうと思っていると、 外が騒がしい。 凱「学が逃亡した？」 蓮「そうよ。脱走している所を監視員がみつけたの。」 近場をみんなで捜すが、みつけれない。 凱「どこに行ったんだ...」 蓮「心当たりはないの？」 江「外...前はこそこそ星龍と、どっか行ってたな。」 蓮「あの二人そんなに仲よかったの？」</p>	
<p>(数ヶ月後) 射撃養成所 所長室</p>	<p>リンと凱歌、所長室に呼び出される。ホイが先に入っている。 所長「学友が見つかった。江輝と王凱歌で話をつけてこい。」 メ「話？どういう事ですか？」 ホ「犯罪組織に入って、チンピラに成り下がっているそうだ。」</p>	

	<p>驚くリンと凱歌。 凱「学はそんなやつじゃない」ホイをにらみつける。</p>	
とある街の飲屋街	<p>きらびやかなネオンが眩しい。凱歌はとまどいをみせた。 凱「なんか、落ち着かない。本当にこんなところに学がいるの？」 江「あーあ、田舎ものはこれだからいやだね。この辺にいるのは間違いないらしい。」 凱「犯罪組織って？」 江「『1211』っていう、急に勢力を伸ばしてきた犯罪組織らしい」</p>	
1211のアジト	<p>学「ありがとうございます。ボス」 ボ「仕事は慣れたか...」 学「なんとか。」 ボ「楽しくはないか？楽しいやつもいるが...な」 不敵な笑みを浮かべながら、ボスは手遊びをしている。 ふと、学のベットサイドに無造作に置いてあった写真を見つけるボス。 ボ「これは？」一瞬だが目を見開く。 写真をいそいで取り返す学。 学「何でもないです。」 ボ「これはおまえではないな？」 学「あ...学校の後輩のです。」 ボ「なんでおまえがそいつの家族の写真を持っているんだ？」 学「盗んだんです。そいつがあんまり大切にしてたもんで。俺にはそんな家族がいなかったから...嫉妬です。ガキの...」 ボ「盗んだものの...捨てられなかったって事か」 ボスはその写真の一つ(凱歌と父親)をとって、びりびりに破り始めた。そして、手を払いながら言った。 ボ「替わりに破いてやったぞ。おれはこの写真が嫌いだ。」</p>	<p>ボスはその人です。(でましょ)</p> <p>破るの好き...</p>
飲屋街	<p>外をうろつく学。 前から見た顔が近づいてくる。ホイと凱歌である。 それを見て驚く学、逃げるがすぐに2人につかまってしまう。 ホイに組み拉がれる学。 外側から凱歌が心配な顔で学をみつめる。 江「どういつもりだ。」 学「(凱歌を見て)もういやになったんだよ。あんなところ。」 凱「星龍が死んじゃったから？」 学「...関係ないよ。もうほっといてくれ。」 江「そういう訳にはいかないな...」 拳銃を取り出すホイ。 凱「何をやる気だ。。」 江「帰ってくるつもりがないのなら...しょうがないな。」 学「...あんに殺されたくない。」 江「そうか(拳銃を凱歌に投げる)ほら、おまえがやれ」 驚く凱歌。 少し離れてお互い見つめ合う、凱歌と学。 凱「(震える)なんで僕が学を殺さないといけないの？」 学「いいんだ。俺は生きていく価値のない人間だ。 本当は星龍に心中して欲しいと頼まれたのに、 怖くて逃げ出したんだ...おまえにだったら殺されてもいい」 凱「出来るわけないよ！」 学「じゃ(凱歌の2枚の写真を取り出す)これで(びりびりに破る)どうだ、破ってやったぞ。 これを盗んだの俺だったんだ。」 はらはらと写真の切れ端が揺らめく。</p>	<p>すぐめっかつちゃった。。あは</p> <p>また破りました。</p>

	<p>凱「...学だったの...」</p> <p>江「早くやれ凱歌。ここで見逃したらお前が処分を受ける。母親に会えなくなるぞ。」</p> <p>凱「！」</p> <p>一瞬のスキに、学、凱歌に近づき、凱歌の手の上から銃を握り自分の胸を撃った。</p> <p>自分の血を浴びながら、倒れる学。</p> <p>凱「学！！」駆け寄る凱歌。</p> <p>江「逃げるぞ！」</p> <p>学「...行け...凱歌」痙攣をする学。</p> <p>凱「(ホイに引っ張られて)学！」</p> <p>学(遠くなっていく凱歌を見つめながら息を引き取る)</p>	
射撃養成所	<p>二人が養成所に戻ってくる。</p> <p>蓮「どうしたの？学は？」</p> <p>江「戻ってこないそうだ。所長に報告してくる。」</p> <p>所長室に入るうとするホイを、凱歌が突然殴る。</p> <p>蓮「ソング！やめなさい」</p> <p>江「いいんだ(口の血を拭き取って)」</p> <p>蓮「何があったの」</p> <p>江「何でもないよ(凱歌を見つめる)」</p> <p>凱「(息を荒げて)...</p>	
1211のアジト	<p>ボ「(電話に出て)学友が殺されている？...しかたない公安にみつからないように始末しておけ」</p> <p>電話を置いて、目を閉じてイスに座るボス。</p> <p>ボ「...あの写真は、おやじに違いない...という事は、俺の弟があの射撃養成所にいるのか」</p> <p>別の所に電話をかける。</p> <p>ボ「ちょっと調べてもらいたい事があるんだ...」</p>	
(数ヶ月後) 射撃養成所	<p>凱「最近リン顔色が悪いよね。気分悪そうだし」</p> <p>蓮「そんな事ないよ。それより、ソング。私ここを辞めるの」</p> <p>凱「え！養成所やめるの？」</p> <p>蓮「うん。私とホイも卒業なの。」</p> <p>凱「卒業って、オリンピックは？」</p> <p>蓮「オリンピックはソングに任せて、私たちは中国の為に仕事をするの。だってもう18歳だしね。いつまでも学校にいてもね。」</p> <p>がっくりと肩を落とす凱歌。</p> <p>蓮「(凱歌の肩を叩き)ソング...もしかして学に何か聞いた？」</p> <p>凱「何を？」</p> <p>蓮「...なんでもない。いい？これからもがんばるのよ。これから何があっても、お母さんをみつかるの。...あなたを忘れない...」</p> <p>お互いの右と左の頬を合わせる。</p> <p>去っていくリン。</p> <p>それをいつまでもじっと見つめる凱歌であった。</p>	<p>よく肩を落とします。</p> <p>物干し台、きなこさんと凱歌のシーンのオマージュです。</p>
1982年 (凱歌16歳) 射撃養成所	<p>リンとホイが去った後、凱歌が養成所のリーダー的存在であった。久しぶりに新しい生徒が1人入ってくる。</p> <p>所「范火清。まだ11歳だ。厳しく指導してやってくれ。」</p> <p>凱「わかりました。」</p> <p>范は、凱歌にいろいろとしゃべりかけてきた。</p> <p>范「凱歌兄さんってこれから呼んでいい？」</p> <p>凱「いいよ。」</p>	<p>2度と見る事のできない？范火清と凱歌の(o(^-^)(^o^)o)なかよし なお話がどーしても書きたかったもので。。</p>

范「（無邪気に笑いながら）よかった。ぼく一人っ子だから兄さんが欲しかったんだ。」

凱「そうかい」

彼はいろいろと喋った。

自分は、母親を亡くし、父親とはぐれてしまった事、でも父親がきっと自分を迎えに来てくれると信じている事。

范「それで、この間までいた収容所でさ、運動神経がいいって事でここに入るように勝手に手配されちゃったって訳なんだ。」

凱「みんな、そんな感じだよ。きっとお父さんが迎えに来てくれるよ。今頃、血眼になって捜しているさ。」

范「うん！ありがとう凱歌兄さん。」

射撃訓練。凱歌のスナイピングを見つめる范。

范「すげえや。凱歌兄さん。俺こんなに出来るかなあ」

訓練の末、范もかなりの才能がある事がわかる。

凱「范火清、今のままで訓練すれば、きっといい射撃手になれるよ。ただ...」

范「ただ...なんだい？」

凱「先生にへらず口を叩きすぎ（苦笑い）」

范「だってさぁ～うるさいんだもん。俺流ってものがあるじゃんかぁ」

凱「まだ早すぎるよ。」

范「そりゃ凱歌兄さんの事なら、なんだって聞くけど...凱歌兄さんの教えてくれる日本語の方が、先生より発音とか正しと思うってみんな言ってるよぉ～」

凱「お前は何でも上達が早いね。」

范「そうかなぁ～俺は凱歌兄さんのマネしてるだけだよ。」

1984年  
（凱歌18歳）  
射撃養成所

あれから2年が過ぎた、オリンピックの候補地がもうすぐ決まろうとしている時であった。

范は既に凱歌の次の実力を持ち、かなり自分の腕に奢っていた。

射撃練習中、誤って范は先生の脚を撃ってしまう。

怖じ気づく范。

先生は、あまりの痛みに大声を上げて痙攣している。

凱歌は他の者にすばやく指示をして応急処置をする。

凱「范！大丈夫か！」

范は、心ここにあらず、凱歌の声も聞こえていない。

凱歌が范の頬を叩く。やっと気がつく范。

范「あ...」

凱「どうした！范！」

范は何も言わず、その場から逃げ去っていった。

ごめんなさい。  
端折りまくってます。

しかも、オリンピック候補地が決まるのは1981年頃のはずなのですが、史実曲げました。  
( )=3 フン(自慢か?)

射撃養成所の建物  
の外

うずくまる范。凱歌が近づいてきた。

凱「先生は大丈夫、急所は外れていたからね。」

范「よかった」

凱「さっきは怖かったんだよね。ぼくも...人を撃った事がある」

范「本当に?!じゃ、凱歌兄さんもこんな気持ちだった?」

凱「...こんな気持ちって?」

范「なんかよくわからないけど...気持ちがいいんだ...」

凱「范火清、ぼくはそんな気持ちにはならない。昔、君のような人がいたけど、自殺してしまった。自分の狂気を...コントロール出来ずに...范にはそんな人になって欲しくない、いいね（范の目をまっすぐに見て）絶対に忘れるんだ。僕たちはオリンピック候補生なんだ。人を殺す...そんな仕事をする訳じゃないんだ。だからいいね！約束だ。」

范「うん...でも凱歌兄さんが、約束破ったら僕も破るよ」

最近、テレビで偶然にレスリーの「鎗王(ダブルタップ)」という映画をみました。この映画、銃器好きな方なら観る価値あり。この主人公の設定が『人殺しにとりつかれていくサイコキラー』（レスリー・チャン永遠にあなたを忘れない(角川書店)より)この設定を借りました。きっと范もこれかな～なんて。星龍もこのような所が多少なりにあったという設定です。



	凱「（微笑）もちろんだ。約束する。」	
（数ヶ月後） 射撃養成所 所長室	<p>凱歌が所長室に呼ばれる。  所「オリンピック候補地が決まったよ。」  凱「（紅潮し）どこですか」  所「ソウルだ。」  凱「ソウル...韓国...（肩を落とす）日本じゃない...」  所「残念だったな。そこで、王凱歌」  ゆっくりとイスから身を乗り出す所長。  所「王凱歌も、もう18歳だ。オリンピックを目指してきたが君にも卒業の日が来たな。」  凱「ぼくはどうなるんですか？」  所「我が中国の為に働いてもらう。今まで隠してきたがこの射撃養成所は、実は我が国の工作員を養成する所でもあったのだ。」  凱「なんですって？」  所「君は今までどんな事を学んできたか...それを思い出してもらおうとよくわかると思うが...」  凱歌は思い起こした、そっだ、まるで工作員...スパイを養成するような内容だった。でもまさか...  凱「じゃあ。リンも」  所「リン?...ああ鄭蓮か、もちろんだ、彼女もかなり悩んだようだが今は世界を飛び回っている事だろう。ホイの方は最初からここが、そういう所だということは知っていたし、文革の頃は虐げられもしたが、彼は幹部候補生だから、今は公安の方で仕事をしているだろう」  どうりで、リンが音信不通なわけだった。  所「王凱歌は、これからもその射撃の腕を生かした仕事をしてもらう事だろう。私も鼻が高いよ。優秀な人材を中国の為に養成できて」  凱「まさか...人殺し？」  所「私の口からは言えないな」と薄笑いを浮かべた。  所「（凱歌の肩を叩き）もちろんだ、この事は他言無用だ。リンもホイもちゃんと守ってくれた。もちろんしゃべったらどうなるかわかっているな？ま、しゃべったとしても誰も信じてくれないと思うが...（笑）」  凱「...はい。」  凱歌の気持ちは決まっていた。</p>	<p>また肩落としました。</p> <p>すいません。もちろん中国にはこんな工作員養成所ありません。フィクションです。（とある国にしたいくらい。。）</p> <p>今頃気がつくの遅すぎるっしょ？私もそう思います。すんごく無理がありますう。</p>
凱歌と范の部屋	<p>范「凱歌兄さん！手紙が来たんだ！」  凱「お父さんからかい？」  范「いや、父さんの事を知っているって人からだって、父さんがこの近くにいるみたいなんだ。会えるって思ったら実現するもんなんだね。次の休みに会いに行くよ。」嬉しそうな范。  凱「そうか、よかったな。ぼくも嬉しいよ。そのまま父さんの所に帰るんだ。いいな。」  范「え・でも、ここ気に入ってるし、凱歌兄さんだっているし家が近いなら通いでもいいし。。次のオリンピックだって」  凱「（范の声を遮る）范火清。幸せになれよ。」  范「??...えっと...うん！」  范は不思議に思いながら、凱歌の寂しげな後ろ姿を見送った。次に二人が出会うのは...18年後の日本...</p>	<p>凱歌ちゃんEPI2でよく范って気がついたな。。なんつって。</p>
（数日後） 射撃養成所	<p>けたたましいサイレンの音。警備員が大騒ぎをしている。  警備員「王凱歌が逃げたぞー！」  凱歌は、物陰に隠れて、警備員達のスキを見て走っていく...</p>	<p>EPI1のあの脱出した所のまんまを思い出してもらえると...いいなあ</p>

<p>(数日後) 射撃養成所から 少し離れた街。</p>	<p>隠れて潜むように、食堂で、皿洗いをしている凱歌。 心身共に疲れた...だが、まだ諦めない。 母さんに会うまでは... そこで、客が読み捨てた新聞を目にした。驚く凱歌。 凱「うそだ...」</p> <p>新聞には、『放火殺人犯は実の息子』と書いてあり、被害者は 范が嬉しそうに言った事のある父親の名前だった。 凱「あんなに...喜んでいたのに...何があったんだ...」 客の話に耳を傾ける。 客1「(同じ新聞を見ながら連れに)これって、1211が 裏に絡んでいるらしいよ」 客2「そうそう、なんでも、この父親が1211に刃向かったら しくて、そのおとしまえに、まだガキの息子にあることない こと吹き込んで、親を殺すようにし向けたとか。 この子、燃える家の前で笑っていたそうだよ。 しかも、逃亡中らしい。怖いね~俺たちも気をつけないと、 1211の殺し屋がやってくるかもしれないぞ」 客1「ま。よっぽど悪いことしてるね。この父親も、 しょせん同じ穴のムジナさ」</p> <p>凱「范...そんなつらい目に...」 自分の事のように悔しがる凱歌。 そこへ、養成所でみた事のある男がやってくる。 急いで裏から逃げる。 凱「もっと遠くに逃げないと。やつらに捕まったら殺される。 学のように...。ぼくは死ぬわけにはいかない。何が何でも 母さんを捜すんだ。」 母の2つの写真を忍ばせている所を手で押さえ、凱歌は走った。 それを遠くから大きな車に乗った男が見つめる。 コー「王凱歌。逃げろ、逃げて私の手の中に入ってこい。 おまえの意思で1211にやってこい。」</p>	<p>アルバイトといえば、凱歌が 市江さんかっていう。。</p> <p>凱歌に説明してくれてるみたいだ</p> <p>范が1211の手紙でおびき出され ると、范の父は別の家族を作っ ていて、范の姿をみて嫌悪感を みせたため、切れてしまい... 1211ってこういう情報の リサーチすごいなぁ(って私が 勝手に都合良く話をくっつけて いるだけとも言える。)</p> <p>1211に入ったら追われなくな りました。。なぜでしょう？ (って、読み手に聞くなっ！)</p> <p>逃げてくたくたになったところで 勧誘されましたさ。</p>
<p>2003年某日 警視庁国際二課</p>	<p>船木が電話で席を外している間、ホイと、きなこは二人きりにな った。 き「ホ...王凱歌って、どんな少年だったんですか？」 江「なんでそんな事を聞くんですか？」 き「いえ...ちょっと気になっただけで」 江「寂しがり屋で...素直で...だが、私には反抗的でしたが」 き「(笑)それはわかります。」 江「...嫌っている者の名前を犯罪時の偽名に使ったから？」 き「でしょうね。しかも、ホイさんはへなちょこでした(笑)」 江「悪かったですね。」すねるホイ。 き「でも、本当はあなたは、王凱歌を気に入ってたんでしょ？ だから、いじめたんでしょ。」 江「...」 き「ガキじゃん」 江「『ガキジャン』という言葉が、わかりません。」 き(わかってるくせに...ホイさん、逆襲しておいたからね。) そんな事で仕事のストレスを解消したきなこであった。</p>	<p>冒頭に戻りました。 ラストがきなこさんのストレス 解消オチで終わってしまった けど。。いいのか？</p> <p>もちろん、このホイさんは 凱歌の事です。</p>

【いろいろな皆さんに(^人^)感謝】

ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございました。

既にEPI3への道で紹介させて頂いている、素晴らしい作品に比べ(基本的には比べれない(;´ `A`))駄作で  
申し訳ないッス。他の皆さんの作品とお話が多少なりともかぶっていると思います。大変失礼ですが、ご了承下さい。  
書くといいながら、今の今まで、ほったらかしにしていたおいらに、いろいろ励まして下さった皆様  
(特に恋人はスキップ様)大感謝でございます。そして、オリジナルの君塚先生!愛すべきキャラクター達を  
" )>アリガトォー----- です。なんとか完成(してるのか?)しましたぁ。